

# 銀の笛と金の毛皮

豊島与志雄

青空文庫



むかし、あるところに、エキモスという羊飼いの少年がいました。父も母もないみなし児で、毎日、羊のむれの番をしてくらし  
ていました。

青々とした野原に、羊たちはたのしくあそんでいます。野の花  
のあいだに、うつくしい蝶がとびまわっています。木立こたちのなかや  
空たかくに、いろんな鳥がさえずっています。日がうららかに  
つています。

エキモスは草の上にねころんで、歌をうたいました。口笛をふ

きました。草の葉でいろいろな笛をこしらえました。葦あしの茎くきでも笛をこしらえました。

——自分も、あの小鳥のようにうたいたい。けれども、いくらうたっても、笛をふいても、小鳥にはおよびませんでした。

そのうちに、ある日エキモスは、葦のしげみのなかに、まっ白な葦を一本みつけました。太くてまっすぐにのびて、白く銀のように光っています。エキモスはめずらしさに、しばらくぼんやりながめていましたが、ふと、かんがえました。

——あれで、笛をこしらえたら……。

すぐに、ナイフで、その葦あしをきりとって、笛をこしらえました。そしてふいてみました。が、少しもなりません。葦笛はただ銀の

ようにひかっているだけでした。

エキモスはがっかりしました。けれども力をおとしませんでした。次の節ふしでまた笛をこしらえました。がそれもなりませんでした。

三つ、四つ、五つ……いくら笛をこしらえても、どれ一つとしてなるものではありませんでした。けれど、笛がならなければならぬいほど、エキモスはなお一生けんめいに、笛をつくりました。今にすばらしいのできる、とそんな気がしました。

とうとうさいごの一節になりました。それでだめだったら、もうまっ白なめずらしい葦もなくなってしまうのです。

「おう、神さま！」

とエキモスはさげびました。あらんかぎりの心をこめて、さいごの笛をこしらえました。そしてこわごわ、ふいてみますと……。

エキモスはおどりがりました。うれしさに涙ぐみました。なりません、なりません。なんともたえようのない美しい音がします。エキモスは涙をながしながら、銀色に光るその葦笛をながめました。そしてまた口にあてました。ふきならしました。なんと美しい音でしょう。小鳥のさえずりにもまけません。

エキモスは笛をうちふりながら、野原のなかをかけまわりました。それから森のはずれの木かげにねころびました。そしていろんな歌をむちゆうになつてふきつづけました。

するうちに、ふと、気がつくくと、羊たちがいつのまにかあつま

つてきていました。木の上には、多くの小鳥がじつととまっていた。エキモスはほほえみしました。羊や小鳥があつまってきた、自分の笛をきいていてくれることが、とてもうれしかったのです。ところが、羊と小鳥だけならよいが……。エキモスはびっくりしてとび上がりました。森の中に、どこから出てきたのか、さる猿や、おおかみ狼や、きつね狐や、のうさぎ野兎や、しか鹿や、しし獅子や、たか鷹や、わし鷲など、いろんな鳥やけだもの獣が、あちらこちらにうずくまっていますのです。

エキモスはどうしていいかわかりませんでした。ことに狼や獅子にはびっくりしました。羊や自分も食われてしまうかもしれない。彼はもう笛のこともわすれて、あとずさりしながら、羊のむれのなかににげこみました。がそのおそろしい獣たちは、じつ

とうずくまったまま、おっかけてはきませんでした。やさしい眼をして見おくつているだけでした。

エキモスは鈴をならして、羊のむれをつれて小屋へかえっていききました。

翌日、エキモスはまた羊のむれをつれて、野原にでました。おそろしい鳥や獣はいませんでした。エキモスは安心して、羊たちを野原のなかにちらばして、自分は木かげにやすんで、白い葦あしづを吹えきはじめました。とても自分がふいているのだとはおもわれぬほど美しい音ねでした。天からひびいてくるような歌でした。

そのうちに、笛の音をききつけて、羊たちは近くにあつまつて

きました。小鳥たちもとんできました。みんなだまってきいています。それからなお、森のおくの方から、いろんな鳥や獣けだものがでてきました。おおかみ狼や獅子ししのようなおそろしいのもでてきました。がエキモスはさほどおどろきませんでした。ただ笛をききにでてきたのだということが、そのようすでよくわかりました。

獣のうちに、五六ぴきの鹿しかがいました。大きな角つのの頭をかしげて、笛にききいつています。そのまんなかにも、ひときわ大きいのが一ついて、角のかわりに獅子のようなながいたてがみがはえ、全身の毛が金色に光っていて、眼が青々とすみきっていました。

その金の毛の大きな鹿には、エキモスもびつくりしました。そんな鹿は、これまでみたこともなければ、話にもきいたこともあ

りません。エキモスが笛をやめて、うっとりみとれますと、鹿はその青くすみきった眼で、わらっているようでした。

エキモスは鹿のそばにやっていきました。金色のふさふさしたたてがみをなでてやりました。鹿はうれしそうにすりよってきます。エキモスが笛をふきだすと、鹿はそばにすわってききいっています。そうして、エキモスと金色の鹿とは、いちばんなかのよいともだちになりました。

エキモスにとつては、何もうれしいことばかりでした。白い葦あしはいくらふいてもあきません。笛をふくと多くの鳥や獣がそれをききにでてきます。みんな仲よくして、ただ笛をきいているだけです。そのなかで、金色の鹿が王さまのように光っています。

エキモスはいつもその鹿とつれだつてあるきます。夕方になると、獣たちは森のおくに、鳥たちは空たかく、そしてエキモスと羊たちは小屋に、それぞれかえつてゆくのです。毎日うらかに日がつつて、野にはいろんな花がさいています。

ところが、ある日、金色の鹿がすがたをみせませんでした。ほかの鳥や獣はでてきましたが、金色の鹿しかだけは、エキモスがいくら笛をふいても、夕方までまつてもでてきませんでした。

その翌日も、金色の鹿はやはりでてきませんでした。エキモスは心配になりました。それからかなしくなりました。もう笛をふく気もしませんでした。——金色の鹿はどうしたろう！ エキモスはそのことばかり考えました。

## 二

金色の鹿がでてこなくなつてから三日目の朝、エキモスはもう何のたのしみもなく、ただいつもの仕事をして、羊のむれをつれて野原にでました。葦あしふえ笛をふく気にもなれませんでした。

すると、エキモスがやってくるのをまちうけてでもいたかのよう  
うに、多くの鹿が森からかけだしてきました。そのうちの 하나가、  
エキモスの上衣うわぎのはしをくわえて、しきりに森の方へひっぱりま  
す。

何か用があるんだな、とエキモスは思いました。といっしよに、

金色の鹿のことが胸にうかびました。もうじつとはしていられません。羊のむれをそこにのこして、鹿につれられて森のなかにはいつていきました。

森のおくふかくなると、人のおつた道もありません。それに、崖があつたり坂があつたりします。エキモスは一生けんめいに歩きました、やがてつかれてきて、足がうごかなくなりました。すると、大きな角つののはえた鹿が、エキモスの前にかがんで、背なかをさしだしました。エキモスはその背にのつて、しつかと角にしがみつきました。鹿は走るように早く歩きだしました。

うちひらけたところにてたり、森にはいつたり、坂をのぼつたり、谷川をわたつたりしました。どれくらいきたのかわかりませ

んが、山ふかいところで、ふいに、谷川のそばの平地にでました。やわらかな草がいちめんにはえて、何ともいえぬよい香りの花がさいています。そしてたくさんしかの鹿がでむかえています。

その平地のおくがけの、崖の下がけのところがけに、エキモスは鹿の背からおろされました。

みると、すぐそのの、草の上に、あの金色の鹿がよこたわつていました。エキモスは声をたててかけよりました。

金色の鹿は、そこによこたわつたまま、身うごきも出来ませんでした。とぎれとぎれに、かすかな息をして、じつとエキモスの方がをみているだけでした。しらべてみますと、肩のあたりから血が流れています。鉄砲でうたれたらしいんです。もうてあてのし

ようもありません。死にかけているんです。

エキモスはかなしさに涙ぐんで、そのそばにすわって、膝ひざのうえに頭をのせてやりました。鹿はうれしそうに眼をつぶりました。エキモスは、その獅子ししのようにながいたてがみをなでてやりました。それから白い葦あしづえ笛をとりだして、さいごのわかれにふいてきかせました。

エキモスが心をこめてふく葦笛は、とてもいいあらわせない美しいひびきをたてました。谷川の水も、しばらくながれやんで、ききいりました。

エキモスが笛をふきやめると、もう、金色の鹿は死んでいました。

エキモスはそのまま、ながいあいだすわっていました。それから、金色の毛皮をすこし、かたみに切りとりました。そして死体を、その崖の下にうずめてやりました。

エキモスが帰りかけると、また、多くの鹿しかがおともをして、の大きな鹿がエキモスを背なかにのせてくれました。そして、崖がけや坂や谷川や森をこして、もとの野原にもどってきました。

羊のむれは、しずかに草をたべています。蝶はとんでいます。小鳥はさえずっています。けれど、エキモスは気がはれませんでした。金色の鹿のかたみの毛皮で、だいじなものをいれる袋をつくって、腰こしにさげましたが、かなしさはまぎれません。笛をふく気にも、とてもなれません。

——だが、あの鹿を、鉄砲でうつたんだらう。

そう考えると、くやしかったり、さびしかったりして、どこか旅にでもでてしまいたくなりました。羊たちもかわいいけれど、金色の鹿が死んだかなしみの方が、もつとつようございました。

エキモスはついに決心して、主人のところへいって、ひまをもらいたいと願いました。

主人はエキモスをひきとめたがりました。けれど、その話をきき、そのかなしみと決心とをみて、願いをゆるしてくれました。

「それでは、都でも見物してくるがよい」と主人はいいました。

「都にはいろいろおもしろいことがあるから、気がはれるかもしれない。けれど、おもしろいのはうわべだけで、ずいぶん悪い人

が多いから、気をつけなければいけないよ。そして、また戻ってきたくなったら、いつでも戻っておいで、使つてあげるから」

エキモスはお札をいつて、主人からもらったお金を毛皮の袋にいれ、白く銀色に光る葦笛あしづえをもつて、ほかにはなんの荷物もなく、つれもなく、ぼんやりでかけました。

だいぶいつてから、エキモスは、道ばたの木かげに休みました。そしてはじめて、どちらへいったものかと考えました。主人がいうように、都へゆくのもいいかもしれないと思ひました。

——だが、都へゆけば、お金がたくさんいるだろう。これだけでたりるかしら。

エキモスは皮かわぶくろ袋をひらいて、主人からもらったお金をかん

じょうしかけました。そしてびっくりしました。皮袋のなかのお金は、みんな金貨ばかりでした。でも、そんなはずはありません。主人からもらった時はたしかに、銀貨や銅貨もまじっていました。それが、みな金貨ばかりになっているのです。

エキモスにはわけがわかりませんでした。ふしぎそうに皮袋をながめました。

——もしかしたら、あの金色の鹿しかの毛皮だから……。

ために、道の小石をひろって、皮袋にいれてみました。とりだしてみると、それが、黄金こがねになっています。

エキモスはびっくりして立ち上がりました。いくつ小石をいれても、とりだすと黄金になっています。それがおもしろくて、や

たらに小石を黄金にしては、四方しほうになげちらしました。

——ふしぎな皮袋だ。あの金色の鹿の毛皮でこしらえたのだ。それさえあれば、都にいつでも不自由はしません。エキモスは都にいくことにきめました。

ふしぎな皮袋とふしぎな葦あしづえ笛……。エキモスは、にわかにか元気がでてきました。そして都をさしてやっていきました。

## 三

まだ汽車や飛行機のないころのことです。エキモスは、いく日かのんきな旅をして、ようやく都につきました。

大きなりっぱな家が、たちならんでいました。うつくしいものが、店いっぱいにかぎってありました。そしてなによりも、人間が多いのにエキモスはびっくりしました。蟻ありのすをつついたように、たくさんの人がいそがしそうにあるきまわっていました。

夕方になると、いちめんに灯がともって、町はいっそうきれいになり、うつくしくきかぎった人が、いっそう多くなりました。

エキモスははらがすいてきましたので、あるりっぱなホテルにはいっていきました。ぴかぴかひかるガラス戸のおくに、白い服をきた男がたっていました。そしてエキモスのようすを、じろじろながめて、いいました。

「ここは、お前さんのような者がくるところではない。食事がし

たいんなら、ほかをたずねてごらん」

エキモスは外に出ました。しばらくゆくと、また、うつくしくきかざった人たちが出入りしてる、りっぱなホテルがありました。そこには行っていくと、ガラス戸のおくの白い服の男が、エキモスのようすをみながらいいました。

「ここは、お前さんのような者がくるところではない。食事がしたいんなら、ほかをたずねてごらん」

エキモスはうなだれて外にでました。

ほんやりあるいていけると、なおいくつも、りっぱなホテルが、ならんでいましたけれど、もうはいつてみる気もしませんでした。

——どうして、食事をさせてくれないんだろう。

そう思うと、なおはらがすいてきますし、かなしくなりました。いつのまにか、大きな川のふちにでました。川には、むこうがわの灯がちらちらうつつて、きれいでしたが、川のふちは、人どおりもすくなく、うすぐらくて、ひっそりしていました。

しばらくゆくと、すこしひろいところがあつて、大きな木が四五本うわつていて、そのなかに、ちいさな噴水ふんすいがありました。ふるいきたない服をきて、靴もはかず、帽子ぼうしもかぶらないでいる、年をとった男が、噴水の水をのんでいました。

エキモスは、はらがすいていますし、のどもかわいていましたので、その男にたずねました。

「その水は、だれでものもんでいいんですか」

年とつた男は、ふりむいてこたえました。

「のんでいいとも。だが、うまい水じゃあないよ」

でも、エキモスはうまそうにのみました。そのようすをみて、年とつた男はいいました。

「お前さんも、どうやら、はらがすいてるようだね」

「ええ」とエキモスはこたえました。「どこでも、たべさしてくれないんです」

「どこでも……」

エキモスは、りっぱなホテルから、おいだされた話をしました。年とつた男はわらいました。

「そりゃあ、そうしたもんだよ。お前さんみたいなの、きたないな

りをした子供に、あんなところで食事をさせてくれるものかね」

「だって僕、お金はもってるんですよ」

エキモスは、かわぶくろ皮袋から金貨を一つとりだして、みせました。

「ほう」

男はふしぎそうに、金貨とエキモスの顔をみくらべています。

エキモスはいいました。

「おじさん、どこか、これでなにかをたべさせてくれるところは  
ありませんか。おじさんもおなかですいているんなら、いつしよ  
にたべましようよ」

「なるほど、それもいいが……」と男はかんがえながらいいまし  
た。「二人きりでたべるのは、すこしもつたないな」

「ほかにもまだ、おなかのすいてる人があるんですか」

「あるとも、たくさんあるよ。からだがわるかったり、靴がなかつたりして、しごとをしにでかけられない者が、いくらもあるからね」

「じゃあ、そんな人とみんなで、たべましようよ」

年とつた男は、とてもうれしそうな顔をしました。きゆうにげんきになって、かけだしていきました。しばらくすると、十四五人の男たちをつれて、もどつてきました。靴のない者やせほそつた者で、みんなしょんぼりしていました。年とつた男は、エキモスをさしてさげびました。

「この人が、おれたちにごちそうしてくださろうという、神さま

のお使いだ」

人々は、エキモスをまんなかにかこんで、うれしそうにあるいていきました。うらどおりのせまい町すじを、右にまがったり、左にまがったりして、やがて、ちいさなたべもの屋にはいりました。

天<sup>てんじょう</sup>井のひくい、きたない部屋で、木のテーブルと木のこしかけとがならんでいて、ランプがくすぶっていました。でも、そこにいつぱいになった人々の顔は、どんなうつくしいあかりよりも、もつとはればれとかがやいていました。

エキモスは、部屋のおくにたっている主人のところについて、  
皮<sup>かわぶくろ</sup>袋から金貨を五つとりだして、かんじょう台のうえになら

べました。

「これで、みんなの人に、うまいごちそうをしてください」

主人は、びつくりしたようすをしました。そして五つの金貨をとって、皆の方へそれをうちふりました。

「おい、みなさん、これだけのごちそうだよ」

わーつとよろこびの声があがりました。

声がでなくて、涙ぐんでる者もありました。エキモスもうれしくて、涙がでてきました。

酒ができました。ごちそうができました。たいへんなさわぎでした。みんな元気になりました。やせほそった病気の者も、あしたから仕事へでかけるといいだします。みんなが仕事のことをはなしま

す。エキモスはまた金貨をとりだして、靴のない人たちのために、靴をかつてきてもらいました。みんなが、あしたからは、自分たちだけで、都じゆうの仕事をするような、元気です。そしてはらいつぱいに、のんだりたべたりしました。

しまいには、「神さまのお使い」のエキモスを胴上げして、よろこびさわぎしました。

夜がふけました。エキモスがねむそうな眼になりますと、たべもの屋の主人は、そまつな家ですが、そのなかのいちばんよい部屋につれて行って、ねかしてやりました。

## 四

エキモスはたのしく眼をさしました。ゆうべのことをかかんがえると、うれしくてたまりませんでした。あの人たちが、あんなによるこんで元気よく食事をしたことは、いままでにありませんでした。

エキモスはたくさんのお金を宿の主人にあずけて、ゆうべの人たちがきたら食事をさせてくれるようにたのんで、都のなかを見物にでかけました。

いろいろな店がありました。いろいろな人がとおっていました。公園や博物館などもありました。

夕方はやく、エキモスは宿にかえって、ゆうべの人たちをまち

うけました。が、その人たちは、夜になって、二三人ずつ、つれだつてやってきまして、お礼をいっただけで、もどつていききました。

エキモスは宿の主人にたずねました。

「あの人たちは、なぜ早くかえつてしまふんだろう」

主人はこたえました。

「それはむりもありませんよ。一日はたらいたんだから、くたびれているんです。それに、あなたにごちそうになつては、すまないと思つてゐるんです。あの人たちはもう大丈夫です。けれど、びんぼうで、おおぜい子供があつたり、病氣だつたりして、ひどくこまつてる人が、まだまだたくさんあります。その人たちをみ

んなたすけてやることは、いくらあなたが神さまのお使いだつて、なかなかできませんまい」

主人は頭をふつて、かなしそうな顔をしました。

「僕は神さまのお使いなんかじゃないんですよ」とエキモスはいいました。「けれど、こまつてる人たちがそんなにあるなら、どうかして、よろこばしてあげたいもんだなあ」

エキモスはいろいろかんがえました。そして、金貨でちよつとしたものを買つては、おつりに銀貨や銅貨をもらい、それを金色の鹿しかの毛皮でこしらえた袋に入れて、みんな金貨にしてしまいました。たくさんたくさんの金貨ができました。それをもつて、エキモスは毎晩おそく、びんぼうな人たちのすんでるところへ、でかけてい

きました。

びんぼうな人たちのところでは、ふしぎなことがおこりました。病気で仕事ができなくて、お金がないので、ものもたべられず、どうしていいかわからないでいる男が、ぼんやり外にたつていまして、そまつななりをした少年が、これでうまいものをおあがりなさいといつて、金貨を一つくれます。男はあつけにとられてるうちに、少年はもうどこかへいつてしまします。

靴をもたない子供が、はだしで使いにいきますと、そまつななりをした少年が、これで靴をおかいなさいといつて、金貨を一つくれます。

窓のガラスがこわれたまま、それをあらたにかうことができな

くて、紙をはつてるところがありますと、夜おそく、おもたいものがなげつけられます。紙がやぶけて、金貨がばらばらと部屋のなかにふつてきます。

それからある朝、まだくらしいうちに、戸をどんどんたたたく者があります。一けん一けん戸をたたいていきます。どのうちでも眼をさします。なにごとかと思つて、おもてにでてみますと、そこに、たくさんの金貨がふりまかれています。みんながとびだしてきて、その金貨をひろいます。

どのうちにも、金貨がたまつていきました。みんな元気になりました。じょうになるものをたべますし、帽子ぼうしや靴もかいました。男たちは、いさんではたらきにでかけますし、女たちは、家の中

をきれいにします。みんなの、しよんぼりした眼はいきいきとかがやいてきます。町じゆうに元気があふれてきました。

それがみな、エキモスのしわざでした。みなの人にもそれはわかっていました。けれど、エキモスを神さまのお使いだとおもっていましたので、おもてだってお礼にいくこともおそろしいような気がして、ただかげで、ありがたがって、ひそひそとうわさするだけでした。

それでも、お菓子や果物などを、エキモスの宿に、そつとどけにくる者がたえませんでした。いくらことわつても、またそつとおいていきます。それには、宿の主人がいちばんこまりました。うちのなかはお菓子や果物でいっぱいです。しかたがありません。

から、ほうぼう知りあいのうちにくばりましたが、しまいには、どこのうちでもかまわずやたらに、それをくばつてあるきました。そのためにも、どこのうちにも、お菓子や果物があるようになりしました。

びんぼうな子供たちはほんとにうれしがりました。これまでのおい顔をしてうちにばかりひっこんでいたのが、お菓子や果物をたくさんたべて、元気になり、公園などにあそびにでました。

エキモスは、そういう子供たちとあそぶのが、なによりたのしみでした。公園の木には、たくさんの雀すずめがいました。エキモスは子供たちとあそびつかれると、木のかげにやすんで、銀色の葦あしづのえ笛をふきます。すると雀たちが、笛の音ねにききとれて、エキモ

スのまわりにおりてきます。あたりいちめん雀ばかりです。子供たちがつかまえても、すこしもにげようとはしません。それを子供たちは、頭にとまらせたり、肩にとまらせたり、手のひらにのせたりして、うれしがっています。

「もうこれでおしまい」

そういつてエキモスが立ち上がって、笛をしまいますと、雀たちも木のうえにとんでいきます。

そのようにして、ある日、エキモスが公園で子供たちとあそんでいますと、まっ黒い服をきた一人の男が、しずかに近よってきました。大きなつよそうな男で眼がするどくひかっています。

男はエキモスのようすをじろじろながめてから、ひくい声でい

いました。

「じつは、あなたにぜひごそうだんしたいことがありますので、あちらまできてくださいませんか」

エキモスはニコニコしていいました。

「ここではいけませんか」

「ええ、ちよつと……ひみつのことですから……」

それでエキモスは、その男についていきました。公園のではありません、馬車がまっています、黒い服をきた大きなつよそうな男が四人のつていました。エキモスはいわれるままに、その馬車にのりました。馬車はいつさんにはしりだしました。

## 五

エキモスをのせた馬車は、どこまでもはしつていきました。くろい服をきたつよそうな五人の男が、エキモスをかこんでいました。

ずいぶんいつてから、馬車は大きな石の門をはいりました。そこでエキモスは馬車からおろされました。あかい服をきて剣をさげてる五人の男が、くろい服の男とかわって、エキモスをとりにこみました。

エキモスにはわけがわかりませんでした。でもべつにこわいともおもいませんでした。あかい服の男たちにつれられて、大きな

たてもののなかにはいり、ながいひろい廊下をとおつて、ちいさな中庭にでました。そしてそこで、じやりのうえの木の腰掛こしかけにすわらせられました。

やがて、正面の幕がまきあがりました。中庭より一だんたかい部屋のなかに、大ぜいの人がひかえていました。

あかい服の男の一人が、エキモスにいました。

「王さまと大臣だ。おじぎをしろ」

エキモスはおじぎをして、顔をあげました。みると、まんなかに、金のかんむりをかぶつてむらさきの服をきている人が、王さまらしく、そのすこし前のほうに、ぴかぴかひかる服をつけているのが、大臣らしゅうございました。そのほかの人たちは、赤や

金のすじのはいった服をつけて、王さまの左右にやらんでいました。

大臣はおごそかな声で、エキモスにたずねました。

「お前は、なんという名前だ」

「エキモスというものです」とエキモスはへいきでこたえました。

「エキモス、お前は魔法つかいだな」

「いいえ、魔法つかいではありません。山の羊かいです」

「その羊かいが、どうして、公園の雀をよびあつめるのか」  
すずめ

「よびあつめるのではありません。雀があつまってくるんです」

「それでは、なんのために、びんぼう人どもの町に、金貨をまき

ちらすのか」

「みんなをよろこばせたいからです」

「その金貨は、どこからぬすんできたのか」

エキモスはへんじにこまりました。しかたがありませんから、金色の皮かわぶくろ袋をとりだして、そのふしぎな力をみせてやりました。銅貨や銀貨をいれると、金貨にかわりますし、石ころをいれても、金にかわってしまいました。

大臣はあかい服の男たちにさげびました。

「その魔法の袋をとりあげて、しばつてしまえ」

エキモスは皮袋をとりあげられ、うしろでにしばりあげられました。どうすることもできませんでした。

大臣はいいました。

「お前は、けしからんやつだ。魔法をつかって、むほんをたくらんでいる。しかしもう、魔法の袋をとりあげたからには、どうにもできないぞ。かくごするがよい」

エキモスはいろいろいいわけしましたが、なんのやくにもたちませんでした。びんぼう人たちのところに金貨をまきちらして、はたらくのがばかばかしいという気をおこさせ、公園で雀すずめをよびあつめて、みんなのきげんをとり、そして神さまのお使いだなどといふらして、むほんをたくらんでいる、というのです。

「これから、七日なのかのあいだ、森のなかの牢ろうにとじこめて、それから、島ながしにいたします」

大臣は王さまにそうもうしました。王さまはだまっとうなずき

ました。

それで、おしまいでした。エキモスは森のなかの牢屋にいれられました。だいじな笛までも、牢屋でとりあげられてしまいました。

森のなかに石でこしらえられて、兵士たちだけがばんをしている、おそろしいさびしい牢屋でした。エキモスはそこにとじこめられ、七日たてば、舟にのせられ、川をくだつて海にいで、海をとおくわたつて、人の住んでいないちいさな島にながされるのでした。

けれど、エキモスはさほどかなしみませんでした。なんにもわるいことをしたのではありません。今にだれかたすけにきてくれ

るような気がしました。

牢屋には、ちいさな窓が一つついていました。その窓からのぞくと、森の木がみえます。木のしげみをとおして、むこうに野原がみえます。エキモスは、山で羊かいをしていたときのことを、なつかしくおもいだしました。

——羊たちはどうしてるだろう。

そして毎日、その窓から、森の木やむこうの野原をながめてくられました。だが、野原には人のかげもみえません。だれもたすけにきてくれるものはありません。

三日たちました。四日たちました。だれもきてくれません。五日……六日……七日……。だれもきてくれません。森のなかはし

いんとしていますし、森のむこうの野原には人かげもありません。八日目の朝、いつも食事をはこんでくれる番人が、エキモスをかawaiiそうにおもつてか、こういいました。

「いよいよきようは、島に行くんだ。なにかねがいはないかね」  
エキモスはすぐにこたえました。

「なんにもありませんが、ただ、なごりに、笛をふかしてください」

「うむ、きいてきてあげよう」

しばらくたつと、番人は白葦しろあしでこしらえた銀色の笛をもつてきてくれました。

エキモスとはびあがつてよろこびました。そのだいじな笛を胸

にだきしめて、なみだをながしました。それから一いっしん心に、笛をふきはじめました。なんともいえないうるわしい音ねがひびきわたりました。エキモスはもうなにもかもわすれて、むちゆうにふきつづけました。いく時間ふきつづけたか、じぶんでもしりませんでした。

そのうち、なんだかさわがしいので、エキモスは気がつきました。そして窓からのぞきみると、びっくりしました。

森のなかいっぱい、鳥けものや獣ばかりでした。鷲わしやおおかみやライオンのようなおそろしいものもまじっていました。エキモスの笛をききにやってきたのです。牢ろうの番人たちはにげだしてしまって、だれもいません。ただ鳥や獣ばかりです。

エキモスは笛をふきやめて、ぼんやりそれをながめていました。ふと気がつくつと、森のむこうの野原のなかに、なにかうごいています。だんだんちかよってきます……。たくさんの人が、馬をかけさしてやってくるのでした。

## 六

エキモスがとじこめられている牢屋へ、馬でかけつけてきたのは、王さまと王子でした。大臣もおともしていました。それからおおくの兵士がしたがつていました。

はじめ、エキモスが牢屋へおくられた時、  
皮かわぶくろ袋は、魔法の

袋だといって、大臣から王さまの手にわたされました。王さまはそれを、じぶんの部屋にもつてかえつて、ふしぎそうにながめました。みごとな金色の鹿しかの毛皮でした。そしてその毛をなでてみてるうちに、ふと、魔法とかいうのを、ためしてみたくなりました。

王さまはその皮袋に、銅貨を一ついれてみました。とりだすと、金貨になっています。小石を一ついれてみました。とりだすと、おうごん黄金おうごんになっています。

王さまは、うれしさに眼をひからしました。そして銅貨や小石をとりよせては、皮袋にいれて、みな黄金おうごんにしてしまいました。くたびれてくると、大臣をよびました。つぎには、ごてんじゆう

の役人をよびました。小石や銅貨をはこぶもの、それを皮袋かわぶくろにいれて黄金にするもの、その黄金を部屋のスミにつみかさねるもの、おおさわぎでした。黄金がだんだんふえてゆくのをみて、みんなむちゆうになりました。

一日たちました。一つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

二日たちました。二つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

王さまに、エキモスとおなじくらいな年ごろの王子がありました。王さまはじめみんなが、黄金をこしらえて、むちゆうになつてゐるのをみて、かなしそうにいました。

「そんなことをして、なにになりますか」  
でも、だれもへんじをしませんでした。

三日……四日……五日たちました。五つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

王子はいいました。

「そんなことをして、なにになりますか」

だれもへんじをしませんでした。

六日たち、七日たちました。七つの部屋が黄金でいっぱいになりました。

王子はかなしそうにいいました。

「そんなことをして、なにになりますか」

だれもへんじをしませんでした。がこんどは、みんな、たがいに顔を見あわせました。そしてため息をつきました。くたびれて

いました。なんだかさびしくなっていました。七つの部屋にっぱいの黄金おうごんの山をみて、どうしていいかわからなくなってきました。

王子はいいました。

「石ころをつんでるのと、おんなじではありませんか」

じっさい、黄金ばかりこしらえて、なにになるんでしょう。こうなると、石ころをつんでるのとおなじでした。これまであんなにとうといものとおもっていた黄金も、七つの部屋いっぱいほどになると、どうにもしようがありませんでした。

——ばかなことをしたものだ。

そうかんがえて、王さまは大臣のほうをみました。大臣も王さ

まのほうをみました。二人ともこまつてしまいました。

そして、八日めの朝になると、七つの部屋いっぱい黄金をまえにして、王さまも大臣の役人たちも、ただため息をつくばかりでした。

そこへ、いちどに、いろんな知らせがまいりました。——人民たちは、エキモスが牢ろうにとじこめられて、いよいよ今日は島ながしになるんだということを、いつのまにかききだして、たいへんさわぎたっています。ぜひともエキモスをうばいかえすとさわいでいます。——エキモスがむほんをたくらんでたということも、びんぼう人たちのところへ金貨がまきちらされるのを、ねたんでる者どもが、かってにこしらえた話です。——そして牢屋のほう

では、ふしぎにも、数かぎりない鳥や獣けものがやってきて、牢屋から森まで、すっかりせんりようしてしまつています……。

王さまは立ち上がりました。王子も立ち上がりました。すぐに馬をひきださせて、牢屋ろうやのほうへかけさせました。それを気づかつて、大臣はおおくの兵士をつれて、あとにしたがいしました。

きてみると、ほんとでした。牢屋のまわりの森のなかは、鳥や獣けものでいっぱいでした。鷲わしや狼おおかみや獅子ししのようなおそろしいのもまじつています。馬はおどろいてはねあがりました。王さまも王子も大臣も兵士たちも、馬からとびおりました。牢屋の窓には、ここにこしてるエキモスの顔がみえます。けれども、鳥や獣のためにちかよれませんでした。

そこへ、エキモスをうばいかえそうとして、たくさんの人民たちがやつてきました。王さまはすぐに、エキモスをゆるすということをふれさせました。人民たちはあんしんしました。けれど、森のなかの鳥や獣をみて、エキモスのところへはちかよえませんでした。

そのうちに、王子はなんとおもつてか、一人で森のなかにはいつていきました。ふしぎにも、狼や獅子もじつとうずくまっていたま、なんの害もしませんでした。王子はずんずんすすんで、牢屋のなかにはいり、かぎをさがして、エキモスの部屋をあけました。エキモスはよろこんで王子をむかえました。

王子は金色の皮かわぶくろ袋をエキモスにかえしていました。

「エキモス、お前はその皮袋で、わたしたちにたいへんよいことをおしえてくれました。人間の欲というものが、どんなにばかじてるものか、おしえてくれました。ありがとう」

王子のあとについて、王さまもはいつてきました。王さまはいました。

「エキモス、わしのおもいちがいだった。お前をくるしめたのを、ゆるしてくれ」

王さまのあとから、人民たちがとびこんできました。どうするひまもありませんでした。人民たちはエキモスをおつかぎあげて、牢屋ろうやからつれだし、野原のなかにはこんでいきました。

それからたいへんなさわぎでした。都じゆうの人が野原にでて

きて、王さまも、王子も、大臣も、兵士も、かねもちも、びんぼう人も、みないっしょになって、エキモスをかんげいするおまつりさわぎをしました。

おまつりさわぎは、一日じゅうつづきました。

そのさわぎのなかで、エキモスはなんだかさびしくなりました。もう都には用がないような気がしました。山の羊たちのことがおもいだされました。そしてその夜おそく、エキモスは葦あしづえ笛と皮か袋わぶくろをかかえて、そつと都をたちのきました。



# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銀の笛と金の毛皮

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>